

氏名	佐藤吉幸
学位(専攻分野)	博士(経済学)
学位記番号	経博第188号
学位授与の日付	平成13年11月26日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	経済学研究科経済システム分析専攻
学位論文題目	構造主義と権力への抵抗

論文調査委員 (主査) 教授 田中秀夫 教授 八木紀一郎 助教授 浅田 彰

### 論文内容の要旨

本論文は1960年代以降のフランスの思想界に長く君臨した二人の思想家、フーコーとアルチュセールを対象にして、論文題目が表現するように、「構造主義と権力への抵抗」という問題を焦点として、二人がこの問題にいかに関与したかを浮き彫りにしようと試みたものである。

#### 第一章 場所論と経済論

本論文はフーコーの人間把握をカント的主体のニーチェ化として捉える。カントは人間を経験的・超越的二重性において把握した。すなわち、人間の認識は表象を受け取る能力と表象によって対象を認識する能力から生じる。カントにとって有限性を本質とする人間は、自らの限界の内部にとどまりつつ、外部を理解しようとする。そのような知のあり方は外部性の抑圧をもたらす。外部を自同者＝同一性に還元する外部の抑圧をフーコーは「人間学的眠り」と呼んで、批判した。

フーコーは自らの限界の内部に留まろうとするカント的人間主体の構造を、ニーチェ的な「外の思考」によって批判する。外の思考とは主体の外部に留まり、外部から主体性の限界を露呈させる思考であり、認識主体を社会的実践、歴史から考察することである。そうしたとき、認識対象と認識との差異が露になる。認識対象に規定されない認識は、諸欲動の闘争が生み出す抑制であり、妥協であるとニーチェは言う。フーコーは、人間の内部のこの闘争を社会的諸関係のなかに存在する諸力間の闘争として読み替える。フーコーはカント的二重体を持つ認識の限界をニーチェに拠って外部へと開いた。主体の経験的審級に欲動、欲望、身体、意志など複数のメカニズムの対立がある。フーコーはこの複数性と超越的審級の単数性(認識)との「ずれ」から主体の統一性の解体を宣告した。

ここから著者は、フーコーの有名なマイクロ権力論に遡る。『監視と処罰』(1975)のマイクロ権力の概念は、社会契約説の法的権力概念とマルクス主義の権力概念の批判を意味した。フーコーは権力を関係性の網目として、戦略、技術、機能作用として、「力の諸関係の多様体」として、支配と抵抗の錯綜した交錯として、捉えた。マイクロ権力の概念のもとでは抵抗の戦略が存立しえない。パノプティコンの「視られずに視る」原理は受刑者たちに規律を刻印する。ここで主体は二つの審級に分割される。権力関係を引き受ける上位の自我とそれに服従する下位の自我である。これは一見、カントの経験的・超越的二重体と異ならないが、ここでの上位の自我は外部の権力の代行者に過ぎない。主体に抵抗の契機はない。フーコーは主体外の経験的領野を複数化するにもかかわらず、主体内部の超越論的審級を複数化しない。超越的審級の単数性が権力への抵抗の可能性を消す。なぜ複数化しなかったか。それはフーコーが主体を権力作用の所産として受動性から考えるからである。

対照的にドゥルーズ＝ガタリ『アンチ・エディプス』(1972)は能動性から出発する。彼らの理論はフーコーの隘路への解答を示していた。彼らはエディプスの家族を権力メカニズム再生産の担い手と捉え、精神分析を批判対象とする。権力作用は国家装置による抑圧に基づくのではなく、エディプス家族というマイクロな装置を通じて再生産される。したがって、彼らは権力への抵抗手段として「反エディプス」という戦略を選択した。

フロイトは生の欲動と死の欲動を対立するとし、二つの欲動が主体を構成すると考えた。この力動的エコノミーをモデル

として、ドゥルーズ＝ガタリは器官なき身体に欲望する機械を対置する。器官なき身体は欲動を制動する死のモデル、生産に対立する反生産、有機体化の拒絶である。他方、欲望する機械は生産の働きを生産する生産の生産であり、有機体を形成する。両者は反撥の関係にある。彼らのアプローチを著者は場所論ではなく経済論と呼ぶ。彼らは、上位の審級による下級の審級の統御という経験的＝超越的二重体、すなわち場所論ではなく、欲望の力動性を強調したエネルギー論、フロイト的＝反エディプス的経済論を選択した。このような問題構成の移行に伴って抵抗の問題も変容する。

欲望する生産は、生産の生産として機械と機械の間の複数の「流れ」を生み出す。主体は経験的領野における複数の流れ＝生産を消費しつつその存在を生成変化させる。主体とは経験的領野に対する超越論的領野とみなすことができる。とすれば、経験的領野の複数の流れの消費によって主体という超越論的領野は複数化される。欲望の能動性は主体に無限の生成変化を引き起こす。欲望の無限の解放は社会秩序と対立するであろう。したがって欲望の抑圧のメカニズムを考えなければならない。社会的抑制と心的な抑圧がそれである。家族的抑圧は社会的抑制の代行者として機能する。エディプス家族は主体に権力の内面化を迫る。ここでフーコーのマイクロ権力概念と接近する。

エディプス化は主体に言表の主体（発話者）と言表行為の主体（言表のなかの主語）の分裂をもたらす。ドゥルーズ＝ガタリは前者を社会的人物、後者を私的人物とし、前者をイメージ、後者をイメージのイメージと捉える。イメージの支配こそ、資本主義が諸々の分裂を利用し、諸々の流れを横領する新たな方法である。イメージを重ねることによって自我が世界の中心になる。これはエディプス化によって複数性を抑圧された場所論的主体にはかならない。資本主義は家族のエディプス化によって複数の欲望の流れを抑圧する。複数化されていたはずの経験的領野と超越論的領野はエディプス化、資本主義によって、単一の経験的自我と超越論的自我へと還元される。

しかし、資本主義には、場所論的単数的主体化を強いるエディプス的権力に抵抗し、経済論的複数の主体へと自らを変容させる手段がある。資本主義は欲望の流れを脱コード化し、欲望の流れを解放するが、脱コード化した複数の流れを再属領化する。この分裂に抵抗の拠点がある。彼らの抵抗の戦略は資本主義に内在する欲望の流れを極限にすることであり、権力への抵抗の戦略を支えるのは、脱中心化された主体における非人称的力能の能動性、その帰結としての主体＝超越論的領野の複数性、他なるものへの生成変化である。

フーコーも『性の歴史』（1976-1984）において転回を行った。「主体と権力」（1982）のなかで、フーコーは「今日の主要な目標」は「私達のいまの在り方を拒むこと」、個別化であると同時に全体化でもある近代的権力の構造のダブル・バインドから解放すること、数世紀に互って強いられてきた個性性を拒むことで新たな形態の主体性を育成することだと述べた。フーコーは、精神分析的な欲望概念に依拠せず、歴史的な文脈のなかで形成された実践の装置、セクシュアリテの装置に依拠しなければならないと言う。身体と快楽をセクシュアリテの装置に対する反撃の拠点に据えるフーコーは、倫理の問題系へと転回する。フーコーは告白という実践に注目し、服従化を批判した。他方、主体の自己への関係を問題にし、主体による自己形成、陶冶、訓練に光をあてた。自己が自己を視るとするのは一日の仕事の評価する検査に近く、自己監視というより自己の観察である。それは権力の内面化をもたらすのではなく、権力関係から解放された道徳的主体を形成する役割を果たす。フーコーは、古典古代、ギリシャ・ローマの哲学者の「自己への配慮」という実践に注目して、権力関係からの脱服従化の戦略を模索する。

フーコーの転回は、構造主義的権力論に孕まれていたアポリアを解消するという理論的要請の帰結であり、近代的主体概念とは異なる新たな主体概念の構築を意味する。フーコーはカントの「啓蒙とは何か」に立ち返り、カントの啓蒙分析を現在性として解釈する。それは目的論的歴史観を排し、特異な瞬間としての現在性、今という瞬間の特異性を対象とする。現在性の哲学という新しい領野は、特異的、偶然的なものに着目して、必然的限界としての批判を可能的踏み越えとしての実践的批判へと変容することを問題にする。

カントは『純粹理性批判』において、可能的経験の範囲を踏み越えようとする理性の使用を越権行為として批判し、理性を可能的経験という限界内に閉じ込めようとした。フーコーは逆の戦略をとる。フーコーは限界的態度を可能的踏み越えと定義する。現在性の哲学は、存在を歴史的な観点から把握するとともに、存在の在り方を歴史的偶然性において把握する。存在は常に既にある歴史的偶然性のなかに投げ込まれている。フーコーの立場は、存在の歴史性を偶然の事実性において、超越論的偶然性において把握しようとした80年代のアルチュセールの偶然的唯物論に接近する。

もし主体の存在を規定する権力関係が複数の出来事、歴史的偶然性の所産であるとすれば、現在の主体の存在様態は偶然的なものであり、別の存在様態への生成変化の可能性は常に開かれている。『監視と処罰』では超越論的視線は権力作用を内面化するだけであって、抵抗の契機をもたない単数的なものであった。しかし、今やフーコーの歴史的存在論批判における超越的審級は、支配（受動性）と抵抗（能動性）を兼備した複数的なものとなる。フーコーは場所論的問題構成を極限まで突き詰めることによって、超越論的審級を複数化し、知の軸、権力の軸、倫理の軸という複数の軸をもつものとなった。

## 第二章 構造変動と偶然性

著者は次にアルチュセールにおいて抵抗の戦略がどのように把握されているかを究明すべく、第一にアルチュセールのイデオロギー論、とりわけ精神分析理論の唯物論化、第二に構造変動と偶然性の関係に迫る。

アルチュセールは1966年にディスクールを科学的、美的、無意識的、イデオロギー的の4種類に分類する一般理論を提起した。彼はラカンの精神分析理論の用語を継承しつつ、精神分析理論から一般理論としての社会理論へと革新する。自我の分裂を問題にするとき、無意識の主体を語る（ラカン）ことは不当である。自我としての主体はイデオロギー的ディスクールに属するものであり、主体は分裂をイデオロギーによって縫合されたものである。このディスクールは鏡像的中心化の構造をもち、主体は超越論的主体＝イデオロギーを鏡像的に反復する。イデオロギー的ディスクールは、国家のイデオロギー装置に呼びかけることによって、主体に実践基準を注入し、支配的イデオロギーへの服従を調整する。その際、無意識は支配的イデオロギーの上に自我を再構造化＝転移することによって、主体のイデオロギー的縫合化を可能にする。イデオロギー的縫合作用において、転移のメカニズムを支えるものは実践であり、ディスクールの物質性とされる。

アルチュセールは精神分析の理論装置を組み替え、その理論的枠組みを唯物論化した。これは精神分析からの認識論的切断であり、この切断は支配的イデオロギーへの抵抗の基礎を作る。このようなアルチュセールのイデオロギー論はジジエクの批判を招いた。ジジエクは法というイデオロギーに主体が従うのはそれが主体に内面化されているからであり、このメカニズムの分析をアルチュセールは欠いているという。しかし、国家のイデオロギー装置は多様であって、ジジエクのように主体への内面化として一元的に捉えることはできない。この多様体は相対的に自律的な装置からなるがゆえに、矛盾を孕む余地がある。ここに階級闘争と構造変動の可能性があり、抵抗の可能性も存在する。国家は支配的イデオロギーを主体に注入しようとするが、諸矛盾、階級闘争の流動的な力関係を抑圧することはできない。偏差、ずれ、偶然性がつねに存在し、抵抗が存在する。

資本主義社会ではイデオロギー的諸装置と主体との間に階級闘争が介入する。それはキリスト教的イデオロギーの構造、超越的主体と諸主体との間の「鏡像的反映」というモデルでは説明できない。資本主義的階級闘争が存在する社会にはイデオロギーの偏差が存在し、イデオロギー的縫合のメカニズムは鏡像的中心化とはならず、支配的イデオロギーへの転移、支配的イデオロギーへの主体の自我の再構造化となる。イデオロギー的諸装置は、その複数性において内部に矛盾を孕む余地のある脆い存在であり、超越的存在ではない。

著者は社会構成体の脱中心化を強調する。アルチュセールは社会構成体を中心のない諸審級の関係構造として把握する。経済的審級による最終決定というテーゼは1972年に放棄され、政治的領野における偶然性の優位（偶然的唯物論）への移行がなされた。そのような変化は極限における発生、非AによるAの生産のメカニズムを生起の概念で理解する考え方と結びついていた。封建的生産様式と資本主義的生産様式の間には系統関係は存在しない。前者は諸要素を生み出すが、諸要素の特殊な結合から後者は生起する。これはヘーゲル＝マルクス主義の拒否である。歴史は非連続性、構造変動という生起、偶然性の必然性として捉えられる。構造変動は諸矛盾の不均等な発展によって生まれる。ここで諸矛盾の結合、置換、圧縮が語られる。アルチュセールは諸矛盾の運動を諸法則を攪乱する偶然性において捉えた。諸矛盾の結合は複合状況、複数の出来事の結合の偶然性による。法則秩序を外から攪乱する偶然性の侵入が構造変動を現勢化するのである。

## 論文審査の結果の要旨

構造主義について従来から問題になっていた最大の論点は、人間主体の消滅という点である。言うまでもなく、カントは近代的自我、主体性哲学の確立者であったが、構造主義はサルトルにまで継承されたそのような近代の人間観をヒューマニズムとして一括して退けた。構造主義者の視線は人間主体にではなく人間の生み出した経済、文化、制度すなわち外部に向

けられ、外部の構造を分析した。では人間主体は解体され、構造の部分に組み込まれてしまったのであろうか。人間の自由はどうなるのか。変革はいかにして可能か。

構造主義の華々しい成果を継承して、権力と自由の問題を根源的に考察したのが、フーコーとアルチュセールであった。フーコーはマイクロ権力として人間を把握するところから出発して、晩年には自己への配慮という新しい倫理へと接近した。アルチュセールはマルクス主義者として構造的決定論の論理を研ぎ澄まし、偶然性に着目し、そこから自由と変革を展望しようとした。

本論文は二人の現代フランスの代表的思想家の解放の理論を抵抗の戦略として理解し、その思想的格闘の軌跡を描き出すことを試みた意欲的な論文である。著者はフーコーとアルチュセールの膨大なテキストを幅広く系統的に読んだ上で、二人のテキストを権力、資本主義への抵抗という視点から解釈する。そのような解釈が成立するのは、二人のテキストが資本主義、社会、権力による抑圧からの人間の解放はいかにして可能かという問い、現代のアクチュアルな課題を背景として構成されているからに他ならない。現代の管理社会という鉄の檻からの脱却を質して、フランクフルト学派のハーバーマスは討議＝公共性に着目したし；アレントは近代を批判して、労働を退け、仕事と活動の再評価に望みを託したとすれば、彼らはどうであったか。

著者は難解なフーコーと抽象的なアルチュセールの思想的遍歴をこのような抵抗の戦略という視点から分析することによって、いわば共通の展望を見いだした。すなわちフーコーにおける「外部」の複数性、多様性、超越論的審級の複数化という思想から自己への配慮、現在性の哲学への歩みに新たな可能性をみる一方、アルチュセールにおける経済的審級の最終決定という思想から、偶然性への力点移動に、抵抗と構造変動の可能性を見るという理解をもたらした。

このような結論は、現在の可能性を新たにとらえ直そうという営為として、国家や権力や既成社会への抵抗の戦略として有意義であろう。またこのような偶然性、多様性、現在性へ着眼は、社会や制度がどのようにして進化するかという現代の社会理論の焦眉の課題へのアプローチとしても興味深い知見である。いずれにせよ、マルクス主義との関係では対蹠的な二人の仕事をお互いに関連づけて統一的に解釈することによって、難解な彼らの思想の軌跡に一筋の光をあて、抵抗、変動、自由の可能性への道をあとづけたことは、現代思想研究への、著者の興味深い独創的な貢献であり、高く評価されなければならない。

しかしながら、本論文はなお改善の余地を残している。第一に、著者の議論は未だ明快な見通しを与えるものとはなっていない。それは、フーコーについて言うと、テキストの解釈にあたってカント、ニーチェ、ドゥルーズ＝ガタリ、フロイト、ハイデガー、ラカンなどのテキストが頻繁に引証され、コンテキストが微細に模索されることに伴う煩雑さ、議論の難解さにもよるが、それ以上に議論の整理が不十分であるためのように思われる。

第二に、それとも関連するが、フーコーとアルチュセールを位置づけるべき、1960年代以降の現代思想のコンテキストを著者がどのように理解しているかについての展望が示されていないために、著者の議論は透明性を欠く結果となっている。

今一点指摘すれば、議論がきわめて抽象的なために、難解になっている。これは著者の思考の特徴でもあるが、フーコーやアルチュセールのテキストにある具体的例証的記述は省略され、理論的エッセンスだけが要約されるために、読者は理解のために余計な労力を投じなければならない。

このような問題点があるものの、本論文は、フランスの現代の思想界において燦然と輝く二人の思想家の思想とテキストの徹底した分析を通して、未だ必ずしも明らかになっていない重要な側面に光をあてた貴重な研究である。よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成13年9月13日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。